

13. Hyperbaric Oxygen によるリンパ球サブセットの変動

牧山隆雄^{*1)} 石田耕司^{*1)} 神園 豊^{*1)}
須田 昇^{*1)} 牧山弘孝^{*1)} 田川 泰^{*2)}
富田正雄^{*2)}

$\left. \begin{array}{l} {}^{*1)} \text{海上自衛隊佐世保地区病院} \\ {}^{*2)} \text{長崎大学医学部第一外科} \end{array} \right\}$

【目的】 昨年我々は、本学会にて、高気圧酸素治療(以下OHPと略)の癌細胞に与える増殖抑制効果とMMCの併用効果について報告した。臨床的には、腫瘍組織の増殖・進展には、担癌生体の抗体免疫能も深く関連しており、OHPがこれらに与える影響は無視できない。そこで今回は、OHP施行後のリンパ球サブセットの変動を中心検討した。

【方法】 対象は、Healthy Volunteer14名(うち喫煙者7名、非喫煙者7名)と、日常OHPに従事し、週のうち1~3回chamberに入っているスタッフ5名とした。OHPはTable 5(2.8ATA, 45分間保圧し、30分かけて1.5ATAまで減圧後、30分間保圧、さらに30分かけて大気圧まで減圧する)に準じて行った。Monoclonal抗体によるリンパ球サブセットの検討は、OHP前と直後、さらに2時間後、2週間後の時点でFlowcytometryにて行った。

【結果および考察】 OKT-4/8比はVolunteer群において2時間後に有意の上昇を認めた。これは、OKT-4の軽度の上昇、OPT-8の軽度の低下によるものであったが、これら自体は有意な変化ではなかった。またLeu-7は逆に2時間後に有意の低下を示した。その他OK-Ialが2週後に有意な上昇を示した以外、他の表面マーカーに一定の傾向はなかった。またVolunteer群のうち、喫煙者では上記の変化はより顕著に出現した。逆にOHPのスタッフではこれらの変動は軽微であり、OHPに対しても頻回の適用によりToleranceないしは順応性が獲得されてくることが示唆された。癌・化学療法とOHPとの併用に際してはこれらの変動を考慮したProtocolが必要であり、また今後、他の免疫学的指標についても検討をかさねて報告したい。

14. 腎腫瘍における superoxide dismutase 活性について

中田英浩^{*1)} 小池 宏^{*1)} 秋谷 徹^{*1)}
片山 喬^{*1)} 斎藤春雄^{*2)} 太田幸吉^{*2)}
千見寺勝^{*2)} 松下徳良^{*2)}

$\left. \begin{array}{l} {}^{*1)} \text{富山医科大学医学部泌尿器科} \\ {}^{*2)} \text{斎藤労災病院} \end{array} \right\}$

【目的】 ヒトには細胞質のCuZn-SODとミトコンドリアのMn-SODがあり、癌細胞では後者が低レベルであると見做されている。しかし腎癌における報告は少なく、治療によりどう変化するかも不明である。これらを解明するために本研究を行った。

【方法】 対象は腎癌患者14例である。4例の罹患腎に腎剔除術を施行し、10例の患者には罹患腎腎への塞栓術を施行した後、腎剔除術を施行した。剔除腎中のCuZn-SOD、Mn-SODを亜硝酸法により測定した。

【結果】 測定結果をU/mgタンパク質(平均値±標準誤差)で示す。腎剔除術のみを受けた群の腎腫瘍中のMn-SOD、CuZn-SODは70±25、9±2であり、非腫瘍中のそれ、31±5、14±2と有意差はない。腎剔除術+腎動脈塞栓術を受けた腎腫瘍中のMn-SOD、CuZn-SODは21±7、6±2、非腫瘍中のそれは12±4、4±1であり有意差はない。非腫瘍部分のSOD活性を比較すると、腎剔除術のみを受けた群のMn-SOD、CuZn-SODに比し、腎剔除術+腎動脈塞栓術を受けた群のそれは、それぞれ有意に($P<0.05$, $P<0.01$)低値を示した。

以上の成績より、腎癌ではMn-SODもCuZn-SODも低レベルを示すことはなく、血流の影響も比較的少ないが、非腫瘍組織では、塞栓術により低下することが判明した。